

こんなことがあると、何でもかんでも「これまでどおり」でやってきたんだよなあ、と改めて気づく。新型コロナウイルスのことだ。

これまでとまるつきり違う四月になった。いつもだったらあれもこれもと出かけさせられる研修だの連絡会だのがどんどん中止になる。毎年開くことが前提になっていて、それを疑いもせず、「この忙しいときに呼びつけて…」と不平をつぶやきながらも決して表には出さず、従っていたあれもこれもが、あつけないほどなくなっていく。

「ないならないで、どうにかなるもんだねえ。」

職員室のあちこちから聞こえてくるそんな声。まったくの思考停止で、今年もこれでいきます、と大半をすましている自分自身が、こんなにくつきりと見える春は今までなかった。よりによって定年退職を前にした最後の一年で。でも、それを嘆く気持ちはずっとない。こびりついてた泥を落としてみたら、地色が案外新鮮なのに驚いた、というところか。

感染がまだ身近なところに及ばず、どこか他人事の意識が消えていらないからそんなこと言えるのだ、とは思。島根県でも感染報告があり、ひたひたと迫ってきたのを誰もが感じ始めた今、そんな脳天気なことを言うことすら不謹慎になっていくのだろうか。

「どうして休校にしないのだ。感染したらどう責任をとるのだ。」

苛立った住民が抗議の電話をかけてくる。「決めるのは市ですのよ。」

「そんなはずはない。命がかかっているんだぞ。」

「いえ、できません。」

いくら言っても分かるうとはしない。不安の矛先は、いつだって前線が浴びる。今、世界中のあらゆるところで収まらぬ怒りをおろおろと受け止めている人たちがいるのだろう。

「これ以上お話しできることはありませんのよ。」

激高してしゃべり続ける声の響きを断ち切るように、受話器を置く。口の中に苦いものが広がっていく。わかるよ、あなたの怒りは。

また鳴るんじゃないかと思つて、受話器を見る。不思議とうんざりとか恐れとかは湧いてこない。かかってきたら、ちよつとだけいっしょに悲しんでみようかなと待つような気にさえなった。

でも、かかってこない。電話の向こうで、男はぼくの官僚的な対応に憤慨しているのだろうか。それとも家族にたしなめられているのだろうか。もしかすると泣いているかもしれない。そう思つたらそんな絵が浮かんできた。

# 夕焼け通信

2020.4.13 1255号

編集 宮森健次

〒690-0823 島根県松江市西川津町4276-402  
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/



専業ババ奮闘記 (その2) 1

## 木幡智恵美

インフルエンザ (1)

今、世界中に新型コロナウイルス感染が広がり、これまで経験したことがない事態に陥っている。私が通う教室や武道館での稽古は休止となり、家に籠ることが多くなった。けれども、毎日多くの人が亡くなり、仕事を失い、収入が得られなくなって生活を脅かされる人が増えている中で、細々とでも毎日暮らしているだけで、有難いと思わなければならない。とにもかくにも、早期の収束を願うばかりだ。

この新型コロナウイルス騒ぎの中、今年はインフルエンザのイの字も聞かれない。そのインフルエンザ、昨年は我が家、娘の家で大荒れした。

娘は職場に復帰して二年目、寛大は年少組、実歩も同じ保育所二年目です慣れた頃だ。週二〜三回の保育所迎えのほか、熱を出せば一日面倒をみるという暮らしはもう習慣のようになり、専業ババの生活も定着してきていた。それが、インフルエンザ騒動で、春に白寿の祝いをしたばかりの義母の介護度が一気に増したのだ。

インフルエンザの嵐は二月に突然やってきた。百歳近くなり、少しづつ介助が必要となってきた義母を一人にしてはおけないので、保育所の生活発表会にはジジに行つてもらった。その二日後、ジジはインフルエンザと診断された。熱はそう高くはなかったが、かかりつけ医の検査で陽性が出た。その二〜三日後には息子が罹った。同じ頃、娘の家でも寛大、娘と続き、忠ちゃんまでが罹っている。

義母にうつつてはいけなないと、夫や息子に近づけないようしていたのだが、ついに咳が出た。デイスタービスでも利用者にインフルエンザ患者が出たということで、朝の検温をすると、37.5度ある。「今日はデイスタービス休んで病院に行きましょう」と言つて着替えさせ、部屋から連れ出そうとしたところ、「立てんがね」と言う。夫と二人がかりで支えるが、脚力が入らないようで、立たそうとしても崩れてしまう。

**30代フリーター** やあ、ジイさん。新型コロナウイルスは、富者も貧者も、有名人も無名人も、多数派も少数派も分け隔てなく襲う。志村けんの死はそれを実感させた。

**年金生活者** ウイルスから逃れようとして、富者がカネの力に、有名人がファンの力に、多数派が数の力に頼ろうとしても、無駄どころか逆効果になる。自分だけ助かろうとする行動は自分以外の人びとの感染を広げ、そのぶん自分も感染するリスクを増大させる。

新型コロナウイルスの流行でマイノリティーや社会的弱者への差別が世界各地で起きていることについて、内田麻理香というサイエンスライターが朝日新聞で次のように語っている。「マイノリティーを共同体や医療から排除することは、結果的に感染のセキュリティホールを広げることになる」(3月29日朝刊)

その危険を除去する責任は第一義的に国家にある。国家がマイノリティー

欠な、自らを開く能力も不十分であることを意味する。これまでそんな場合は内戦の当事者以外の単数または複数の国家が停戦を仲介することがあった。だが、シリアではロシアやトルコといった、仲介役になってもいい国家が内戦に加わっている。国家間の戦争を阻まれた国家がその代替として内戦への介入を続けている姿がそこにある。

国家に備わっている、自らを開く能力は、国家の単独の力ではない。国家間システムがそれを支えている。というよりも、このシステムは国家の存立そのものを支えている。ウエストフアリア条約を元祖とする国際法、国連をはじめとする国際組織、国家間の諸条約、それらなしに現在の国家は成り立たない。

今のシリアには、この国家間システムに相当するものが不在だ。新型コロナウイルスはWHOの存在をきわ立たせ、諸国家間の情報の通路を拡張するなど、国家間システムを活性化させた。それと

を分け隔てなく遇することは、国家が利益を供与するパイプを特定の集団や層に対してだけでなく、すべての人たちに開くことを意味する。吉本隆明がたびたび強調した「国家を開く」ことの具体化のひとつがそこにある。

**30代** 現実の国家はそうなっていない。

**年金** パンデミックによる経済への打撃は、各国政府に個人への現金給付政策を強いている。それはベーシックインカムのように恒常的なものではないが、昔からある特定の層や集団的に絞った給付とは違う。このことは国家のもつ再分配のパイプが今までよりも幅広い人びとに対して開かれることを意味する。

新型コロナウイルスは各国の情報の通る扉を大きく開け、その移動を高速化した。閉鎖国家の中国が感染に関する情報をリアルタイムで発信しただことにそれは象徴されている。諸国家は世界同時に自らを対外的に開き始めた。それと同時に対内的にも、再分配のパイ

同様のことがシリアに起きるかどうか、まだ見通すことはできない。

**30代** 自由を何よりも優先するアメリカ人が一斉に家に閉じこもるなんて想像もできなかった。

**年金** このウイルスは私たちに利他的な行動を強いる。他人からうつされないようにするだけでなく、他人にうつさないように行動しないと、感染がいつそう広がり、わが身に危険がおよぶからだ。うつされる危険だけではなく

プを中心に自らを開きつつある。

**30代** 国家を閉じる究極の行動が戦争だとすれば、このウイルスは戦争を阻む働きもするだろうか。

**年金** 米海軍の原子力空母セオドア・ルーズベルトでの感染拡大は、ウイルスがこの超大国を戦争どころではない状態に追い込んでいる象徴的な出来事と言っている。国家間の熱い戦争、リアルな戦争はすでに不可能に近いのが現在の歴史段階であり、パンデミックはそれをいつそう確実なものにする作用をしている。

**30代** だが、内戦中のシリアでは、感染者、死者が出ている中で戦闘が続いている。

**年金** 国家と国家の間の戦争なら存在する双方の当事者能力が、内戦の場合には不十分にしか存在しない。政府は国内を統治する力を失っているという意味で、そして反政府勢力は国家のような統治のシステムを備えていないという意味でそう言える。当事者能力が不十分ということは、戦争の停止に不可

い。感染の拡大が医療崩壊を招き、自分が重症者、さらには死者のひとりになる確率を高める。

流行が長期化すると、私たちの利他的な行動も長期化し、やがて習慣化する。流行が終われば習慣はいつたん衰退するだろうが、再び新たなウイルスが世界を襲い、しかもそれが繰り返される可能性が高くなると、人類は自らの行動様式をそれに備えたものに変えざるを得ない。

このことは社会もまた利他的な行動をスタンダードとする社会に変容せざるを得ないことを意味する。いま世界を覆っている競争原理はその領分を縮小していき、それに代わって共生原理が拡大していく可能性がある。今後もパンデミックが繰り返される可能性がある以上、国家はそれに対応する富の再分配システムを構築することを迫られるからだ。資本主義の高度化とテクノロジーの発達が加速する富の稀少性の縮減がそれを可能にする条件を用意しつつある。

## ニュース日記 733 中村 礼治

## 新型コロナウイルスが 変える世界